

僕のスライムは 世界最強

捕食チートで
超成長しちゃいます

MY SLIME IS THE STRONGEST
ALL OVER THE WORLD

空水城

Mizuki Sora

2



ビィ&クイーンホーネット

『虫群の翅音』のリーダー。
クイーンホーネットを従える。

ファナ・リズベル

ルウの幼なじみの女の子。
冒険者として
有力パーティに
所属している。

シャルム・グリューエン&レッドアイ

冒険者ギルド職員のフールな女性。
従魔は悪魔種のレッドアイ。

ルウ・シオン&ライム

ちょっと気弱な
駆け出し冒険者の少年。
従魔のライムは【捕食】
スキルを持つスライム。

クロリア・ハーツ&ミュウ

ルウとパーティーを組む少女。
従魔のミュウは
回復や支援が得意な
ハピネススライム。

ペルシャ・アイボリー&シロ

魔石鑑定士のお姉さん。
神獣種のホワイトキャット、
シロを従魔にする。

CHARACTERS

ティマーズストリート

1

微かな風が森の木々を揺らし、ざわめきが穏やかに広がる。

木漏れ日が降り注ぐ中、僕は背中に温かい光を浴びながら身を屈めていた。

地面に落ちた茶色の結晶に手を伸ばし、一つ摘む。

僕はルウ・シオン。生まれ育ったパルナ村を出て冒険者になつた僕は、依頼を受けてスライムの従魔——ライムと一緒に森に来ている。

地面に転がつていた数個の茶色結晶をすべて小袋の中に収めたところで、後ろから一人の少女が手元を覗いてきた。

僕のパーティメンバー、クロリアだ。

両肩で揺れる黒髪のおさげ。胸に抱えたピンク色のスライムは、彼女の相棒、ミュウ。

「結構集まりましたね」

つぶらな瞳で袋を見つめながら微笑む彼女と目を合わせ、僕は頬を緩めた。

「うん、そうだね」

僕はガラッと音を立てて小袋を掲げる。

パンパンに膨らんだそれを眺めて、頭上のライムが嬉しそうにしているのが分かる。

初心者におすすめと言われて僕らが受けた依頼は、ある周期ごとに森に出没する植物種のモンスターを討伐するというものだ。

そのモンスターの名前は『ウィザートレント』。自立歩行する樹木型のモンスターで、人よりも若干背が高く、枯れ木のような肉体と側面から伸びる数本の蔓が特徴だ。

倒すと奴らが落とす茶色の魔石が、討伐の証明になる。

回収を終えて立ち上ると、同じくらいの目線になつたクロリアが問いかけてくる。

「確か、クエストクリアは十四分でしたっけ?」

「うん、そうだよ。もう二十個は集まつてると思う」

再び小袋を揺すって、魔石の数を強調する。

ライムとミュウが健闘してくれたおかげで、討伐はかなりはかどった。おそらく、どちらか一方でも欠けていたら達成できなかつたと思う。そんな、見事な連携だった。

魔石を確認したクロリアは、笑みを深めてコクリと頷いた。

「では、そろそろ戻りましょうか」

「うん」

僕たちは森の出口に向けて歩きはじめる。

ここはグロッソの街の東にある森……冒險者試験にも使われた場所だ。

だから、僕たちの試験のときに討伐対象だったマッドウルフも度々襲ってくる。

無事にウィザートレントの討伐を済ましたけれど、気を抜かないように警戒しながら歩かなければならぬ。

しかし、あまり気を張りすぎるのも良くないと想い、なんとなしにクロリアに話を振った。

「それにしても、初心者用クエストっていう割には、ちょっと手こずっちゃつたね。確かウィザートレントのランクはEで、レベル10じゃなかつたつけ?」

「はい、そうですよ。でも、私はその情報よりも少し強く感じました」

あつ、やっぱりクロリアも同じだつたんだ。

ウィザートレントには強い生命力に敏感に反応する性質があつて、森を通る人たちがよく襲われる」と聞く。

触れた相手の生命力を吸い取るスキルを持つていて、鞭のように伸びる蔓は確かに厄介だ。

レベルは10ながらランクは下から二番目のEと低く、攻撃パターンも単純なので、僕たちみんなが討伐する対象としては打つてつけのモンスターとされている。だから僕は、思いの外苦戦したこと違和感を覚えた。

最初はライムの【限界突破】だけで倒せると思っていたが、体当たりを数回当たってもまだ倒れず、結局最後は【分裂】と【自爆遊戯】を併用して片をつけた。

クロリアと回復魔法が使えるミュウがいたからいいものの、【分裂】の多用はライムの負担が大きくなる。そこまでしなくては倒せないウイザートレントが初心者向けというのは、どうも腑に落ちないのだ。

それとも、僕たちの戦い方がまだなつていないのかな？

ちなみに、冒険者の間ではレベル10は『ビギナーズライン』と呼ばれていて、すべてのモンスターに共通するレベルアップの境界線になつていてる。

そこから上はレベルが上がりづらくなつたり、何か特別な経験をしたりしなければ強くなれないらしい。

だから、一般的な野生モンスターのほとんどがレベル10（ビギナーズライン）を越えることはないのだと、冒険者になつたときにギルドの受付を務める——シャルム・グリューエンさんが教えてくれた。

もつとも、特別な環境にいるモンスターはこの限りじゃないし、同じレベル10でもランクによつて強さはまちまちだ。

ちなみに、レベル20が『ミドルライン』、レベル30が『マスターライン』と呼ばれていることも最近知つたばかりだ。学ばなければならぬことは戦闘だけではないと改めて思い知らされる。

「私たち、まだまだ新人冒険者つてことですかね？」

まるで僕の心中を覗いたように、クロリアが苦笑した。

先ほどの会話の続きだと気付いた僕は、同じく苦笑^{にかわら}して応えた。

「たぶんね。でも、僕たちが協力して欠点を補^{おぎな}い合えば、充分戦える。それに、まだこれからだよ。少しづつ強くなろう」

「はい！」

気合充分な僕たちの声に、お互いの相棒も元気な鳴き声を上げた。

今日もなんとか依頼達成。

これが今の僕らの日常。

二人と二匹だけの小さいパーティーながらも、コツコツと依頼をこなし、宿代ご飯代を稼いで、毎日四苦八苦^{しきはく}している。

苦しいのは確かだけど、バルナ村では絶対に味わえなかつたこの日常は、僕を飽きさせることがない。

これも英雄たちの通つた道なんだと思えば、不思議と楽しく感じられるし。

こうして今日も無事に仕事を終えて、クロリアたちと談笑しながら帰路に就いた。

冒険者試験に合格し、念願の冒険者の仲間入りを果たしてから、早くも一週間が経つた日のことだつた。

この一週間で僕たちが達成した依頼は、大小合わせて十以上はあるだろう。数だけを見れば、新人冒険者らしからぬ好成績だと言える。

森の中でモンスターと戦つたり、街の中を駆けずり回つて探し物をしたり、時には街から離れた山で泥だらけになりながらアイテムを探取したり。

しかし、やはりまだ新人冒険者。ランクも最低の銅級なので、威張ることは何もない。

冒険者にもモンスターと同じようにランクが存在する。
A～Fまであるモンスターとは違い、冒険者のランクは銅級、銀級、金級のたつた三つだ。それによつて受けられる依頼も違つてくるし、銅級というランク付けをされている限り、新人らしさはつきまとう。

では、どうすれば立派な冒険者になれるかというと……依頼五十回クリアにつき一度受けられるという昇格試験に合格するか、何か大きな功績をあげてギルドに認められて階級を上げてもらうしか方法はない。

僕はそんな話を聞いて、当分は銅級冒険者として頑張つていくことになりそうだと嘆息した。

英雄までの道のりは長い。

本日もその一步を着実に踏みしめて、僕たちは街へと帰還したのだった。

報告のために冒険者ギルドに戻り、受付にいる赤髪の女性のところに一直線に向かう。

「シャルムさん、ただいま戻りました」

「んっ？ ああ、君たちか」

声を掛けると、何かのお仕事中だつたらしいシャルムさんが振り向いた。

ここ一週間でそこそこの数の依頼をこなしたけど、決まって僕らはシャルムさんに手続きをお願いしている。

ウイザートレントの依頼も、今朝彼女からの紹介で受注したものだ。

「ウイザートレントの討伐依頼、完了しました」

「うん、ご苦労様。さつそく討伐証明の魔石を見せてもらおうか」

後ろにいるクロリアに目配せすると、彼女は腰に下げた袋の紐を解き、受付カウンターの上に置いた。

たいていの討伐依頼は数が指定されていて、今回は十四以上倒せばクエストクリア。そこからは五匹倒すごとに報酬が上乗せされていくという形式だ。

シャルムさんは袋から一つずつ魔石を取り出して数えていく。

「……二十匹分か。ずいぶん頑張つたみたいだな」

魔石をすべて卓上に並べた彼女は、称赞の言葉を送つてくれた。

「い、いえ」

「これだけ討伐したなら、報酬もその分高くなる。よくやつてくれた」

赤髪のシャルムさんは、麗しい微笑を僕たちに向ける。

反射的に僕はさつと顔を伏せた。僕のこの反応も毎度のことだ。

心地好いんだか悪いんだか……クールで美人なシャルムさんと話していると、いつもよく分からぬ気持ちにさせられる。

もじもじしながら併んでいると――

「では、その報酬についてだが……んつ？」

突然、シャルムさんが詫しげな反応を見せた。

目を細めて、カウンター一面に並べられた魔石をじいつと見つめている。

ただでさえ迫力のある赤い瞳が、ますます怖い印象に変わっていて、僕は恐る恐る声を掛けた。

「ど、どうかしましたか？」

「……いや」

小さく呟くシャルムさんだが、確実に何かある様子だ。

彼女はそのまましばらく魔石を見つめながら、額に手を当てて思索する。

時折カウンターから魔石を摘んでは光に透かして、まるで鑑定でもするかのように眺めている。我慢できなくなった僕は、再びシャルムさんに声を掛けた。

「あ、あのぉ……シャルムさん？」

「すまない。この討伐依頼の報酬、少し保留にさせてもらつていいかな？」

「えつ？」

なんで突然そんなことを？

思わず疑問を口にしそうになるが、冒險者ギルドの職員である彼女の決定に無闇に反対するのは賢い態度とは言えない。

しかし理由がさっぱり分からぬ。彼女の言うとおり保留するにしても、僕の独断では決められないのに、振り返つてクロリアの反応を確認する。

彼女は一瞬きよとんとしたが、すぐにこくこくと頷いてくれた。

同意が得られたところで、僕は遠慮がちに疑問を投げかけた。

「か、構いませんが、いつたいどうして……？」

「いや、私の取り越し苦労ならそれでいいのだが、少々気になることがあつてね……」

その言葉を聞いて、僕は思わず苦笑する。

「もしかして、僕たちが持ち帰ってきた魔石、全然違う物でしたか？」

「えつ……あつ、いや、そういうわけではないよ。これは間違いなくウイザートレントの魔石だ。というか、そんなことは討伐した君たち自身が一番分かつてゐるだろう？」

「は、はあ……」

僕たちを安心させるように、優しく微笑むシャルムさんに、僕はただ曖昧な返事をすることしかできなかつた。

なんだかよく分からぬけど、とりあえず彼女に任せておくのが良さそうだ。

ここ一週間でシャルムさんの仕事ぶりは存分に見てきた。

無駄のない動きと疲れを見せない姿。明らかに他の人よりも数段優れているであろうことは、疑う余地もない。

僕は疑問を振り払つて、笑みを浮かべる。

「それじゃあ、僕たちはもう帰ります。後がつかえて受付を混雜させてしまうのは忍びないので」「ああ。報酬を後回しにしてしまつて申し訳ない。また明日、受付に来てくれ」

「はい」

しつかり頷いた僕は、終始頭の上で静かにしていたライムと、後ろに控えているクロリアたちを連れて、混雜しはじめたギルドを後にした。

人混みから抜け出た僕たちは、思わずふはつと息を吐く。

「なんだつたんでしょうね？」

ギルドの建物に視線を向けたクロリアが、小さく首を傾げた。

「さあ？ でも明日になれば分かるでしょ。さつ、宿に戻つてご飯にしよう。ギルドの酒場で食べ

ると宿代くらいかかっちゃうし」

それに、今日は報酬が出なかつたから、なおさら節約しなくちゃ。

どうやらクロリアも僕の言いたいことが分かつてゐる様子で、後ろ髪を引かれつつも、宿を目指して歩きはじめた。

二人で取つてゐる宿屋の食堂では、ギルドの酒場には及ばないものの、それなりに美味しいご飯を出してもらえる。

値段も半分以下だし、宿の利用者は割引でさらにお安くなる。

今日は何を食べようかな？

やつぱり日替りのメニューが量も値段もお得だから、いつも二人でそれにして……

バルナ村にいたときとはまるで違う波瀾万丈な日々だけど、節約志向だけはまつたく変わつていいのは、喜ぶべきなのか悲しむべきなのか。

晩ご飯のメニューを考える傍ら、ポケットの中の財布の軽さを意識して、僕は小さくため息を吐いた。

当面の目標は、強くなることでも、冒險者ランクを上げることでもなく、お金の確保にするべきかもしない。

* * * * *

宿屋『芽吹きの見届け』。

木造二階建てで、古めかしさよりも味わいを感じる外観だ。

二階と三階はすべて宿泊部屋になつており、僕とクロリアもそれぞれ部屋を取つてゐる。

一階にはそこそこ広い食堂があつて、宿を取つていない人も利用できるのが親切なところだ。

僕たちは今、その食堂で夕飯を食べている。

僕とライムが丸パンと野菜スープのセット。クロリアとミュウは鳥肉を丸々豪快に焼いたもの。

この一週間行動をともにして、彼女たちのことをかなり理解できた。

ミュウは最初の印象通り天然で、時折ライムが熱の籠もつた視線を向けても、まるで気にする様子がない。終始笑顔を絶やさず、二重の意味でみんなを癒やしてくれる。

クロリアは最初の印象通り恥ずかしがり屋で、人と話すときなんかはもじもじして上手く声が出せなくなることが多い。

しかし何よりも意外なことに、二人とも男性冒險者が目を丸くするほど大食いだ。

彼女たちと一緒に食事をするときは、毎度その食べっぷりに驚かされている。

もちろん今日も。

クロリアとミュウが、名称不明な鳥料理を満面の笑みで頬張つてゐるところを見て、僕は思わず固まってしまう。

ミュウに氣があるライムですら、呆気にとられて目を点にするほどだ。

確か彼女たちの故郷の村は、戦闘能力の高いモンスターを呼び出し、強いティマーを輩出することで有名だつたはず。

クロリアはその恩恵にあやかれず、可愛らしいミュウを召喚してしまつたけど、血の気の多い村人の特性はしつかり受け継いでいるのだろうか？ なんとも不釣り合ひだが。

手に持つた丸パンのことも忘れて、しばし呆然と彼女たちを眺めていると、きょとんと首を傾げられてしまつた。

僕は“なんでもない”と首を横に振つて、食事を再開する。

たぶん栄養は身長やお腹の方ではなく、全部別のところに持つていかれてるんだろうなあ……なんて不謹慎なことを考えていると、思わず胸元に目が行きそうになるが、慌てて視線を逸らす。なんとなしに食堂の壁を見ていると、そこに掛けてある額縁に目が留まつた。

中には白い紙が一枚。何か文字が書かれていて、見たところ、誰かのサインだと思われるが、独特の崩した書体で、遠くからだと読み取れない。

僕は、卓上の水差しを取り替えに来た食堂のおばさんに、興味本位で声を掛けた。

「あの、おばさん」

「はいよ。どうした？」

「あそこに飾つてあるサインって、誰のものなんですか？」

おばさんは首を巡らせて額縁に目を向ける。

ここに泊まるようになつて以来、何回かこの食堂を利用している。

そのたびに目につき、ずっと気になつていたのだが、いつも聞くタイミングを逃していた。

もし読んだことのある冒險譚の英雄のものなら、夢に出てくるくらい目に焼き付けておこう。そういうじやなくとも、名の知れた**涙腕**のティマーさんのものかもしれないし。

僕は密かにわくわくしながらおばさんの返事を待つ。

このとき僕は、そのサインが最近書かれた真新しいものだと気付いていなかつた。

「ああ、あのサインね。あれはアナ・リズベルちゃんのものだよ」

「ごほつ……！」

スープの野菜が喉につつかえた。

「ど、どうしたんですか、ルウ君!?」

「ゴホッゲホッ！ な、なんでもない……」

いや、なんでもなくはないんだけど。

巨大な肉料理を頬張りながら心配してくれるクロリアに、僕は右手を上げて“大丈夫”と合図する。

幼なじみのアナのサインが、なんでここにあるんだ？

冒險者ギルドに勧誘されて街に出た彼女が、どうしてサインなんか書いてるんだろう？

見ると、隣で食事をしていたはずのライムは、瞳をキラキラさせてサインを見つめていた。

むせ込んでいた僕が落ち着いたタイミングを見計らつて、おばさんは話を始めた。

「アナちゃんはこのグロッソの街で冒險者になつて、少しの間ここ**のギルド**で活動をしていたんだよ。そのときに利用していた宿が、うちさ

そんなおばさんの情報に、僕ではなくクロリアが反応を示す。

「へえ、そうなんですかあ」

「えつ？ クロリアは、アナの……アナ・リズベルのこと知つてるの？」

「はい。もちろんですよ」

こいつはびっくり……と、僕は目を丸くする。

アナってそんなに有名になつちゃったんだ。

この一週間、街で暮らしてきたのに、全然噂は耳にしなかつたけど、クロリアが知つてているつことは、僕が思つている以上の知名度なんだろうな。

これをパルナ村のみんなが聞いたらなんて言うか……

そんな考えを巡らせていると、クロリアがアナについての情報を、なぜか得意げに話しあじめた。

「わずか十五歳にして、冒險者ギルドの本部から直々に勧誘を受けたドラゴンティマー。冒險者になつたその日に、色んなパーティから引く手数多で、この街の近辺ではかなり有名な方ですよ。

私たちと同じ年だというのに、すでに冒險者ランクは銀級シルバーだとか

「へ、へえ～」

なんだか事実だという実感が湧かず、聞けば聞くほど“誰のことやら?”と思えてくる。

「あれ？じゃあ、今、アナはどこに……？」

「さあ、分かりません。ですが、噂だとどこかの有力パーティーに加入して、すでにこの街は離れ

たとか」

「……そ、そう」

僕は密かにがっかりする。

このところ、冒險者試験や自分自身のことに必死だつたけど、そもそも僕がこの街まで急いでやつてきたのは、アナに会うためだ。

結局会うことはできなかつたけど。

でもまさか、アナがサインを求められるほどの有名人になつていてるなんて思わなかつた。それに、同じ宿屋を利用していたとは……。色々びっくりしすぎて疲れた。

気持ちと頭の整理のために、ふうーっと一息吐く。

すると正面のクロリアが、頬張つたお肉をもぐもぐしながら問いかけてきた。

「ルウ君はアナさんのこと知らなかつたんですか？」

「えつ……？ あつ、うん、まあ……そうだね」

「知らない方が逆に驚きですよ。少しばかり情報収集のためにギルドの掲示板をご覧になつてはどうですか？ そうでなくともアナさんは同業者ですし、噂は自然と耳に入つてくると思います」

「ま、まあそうだよね。でも僕、ああいう掲示板つていうか、細かい文字を読むのが苦手で……。物語だつたら大歓迎なんだけど」

苦笑しながらそう言うと、クロリアは“典型的な男の子つて感じですね”と愉快そうに笑つた。

再び巨大なお肉に食いつきはじめた彼女を見て、思わず“そつちは例外的な女の子だね”と返しそうになつたけど、それは喉の奥に引っ込める。

「……噂ねえ」

そういうえば、野生のモンスターにちよつとした異変が……なんて噂もあつた気がするな。

僕はテーブルに頬杖ほおづえを突いて先ほどの会話を思い出す。

どこかの有力パーティーに入つたらしいアナ。会えるのはまだ先かな。

まあ、有名になつてしまつたのなら、街中で見かければ周囲の人の反応で自然と目につくだろう。

僕は彼女に会える時を楽しみにしつつ、残りの野菜スープを一気に飲み干した。

* * * * *

翌朝、頭にライムを乗せた僕は、ミュウを抱えたクロリアとともにギルドの前で立ち尽くしていた。

建物の中を覗き、首を傾げる。

今日も元気に依頼を受けようと意気込んで来たのだけれど、なんだか受付のお姉さんたちの様子がおかしい。

何かのイベントもあるのか、朝にしてはとても慌ただしい雰囲気だ。

忙しいなら出直した方がいいのかも……そう不安になりながら何んでいると、ちょうど入団前を通りかかったシャルムさんと目が合った。

「んっ？ ああ、君たちか。おはよう、来ててくれたよかつた」

……来てくれて？

挨拶を返しながら、どういうことですか？ と視線で問いかける。すると彼女は、ちらりと受付を一瞥してから言つた。

「話したいことがあるんだよ。昨日のウイザートレント討伐の件だ」

僕は“ああ”と思わず声を漏らす。

そういえば、昨日シャルムさんの判断で報酬は保留になっていたんだ。貴重な収入源だというのに、忘れかけていた。

まあ、昨日は色々あつたから仕方ないけど。

周りが騒がしいことはいつたん置いといて、前のめりに聞く。

「そ、それで、報酬は……？」

「まあ、そんなに慌てるな。こんな場所ではなんだし、奥で話そう」

そう言つてシャルムさんは、僕たちを受付カウンターの前に案内してくれた。

入りづらかつたけど、彼女の赤髪の背中に隠れるように、ちょこちょこついて行く。いつもの場所で対面すると、彼女は報酬の入った小袋をカウンターの上に置いた。

「ウイザートレン特二十匹の討伐で、報酬は一万五千ゴルドだ」

「は、はい。ありがとうござい……？」

さつそくそれに手を伸ばしたが、掴む寸前で僕は固まる。

「一万五千ゴルド？ 聞き違いかな？ 彼女が口にした金額に引っ掛かりを覚えて、僕は眉を寄せた。

「ちょっと、高すぎませんかね？」

伸びした手を弄びながら、上目遣いに問い合わせた。

「……？ 嫌なのか？」

「い、いえ、そういうわけではなくて」

ぶんぶんと激しく首を振つて否定する。

報酬が高いことは問題ない。むしろ喜ばしいことだ。

本来なら他の仕事と掛け持ちでやりくりしてもおかしくない新人冒険者なのだから、収入が増え
るに越したことはない。

だけど、この金額はちょっとどころではないレベルで高い。

むむむと眉間にしわを寄せていると、そんな僕に代わってクロリアが口を開いた。

「この前見た他のパーティーは、私たちと同じようにウイザートレン特討伐をして、確かに……計
二十五匹で一万ゴルドくらいだったと思いませんが、どうして私たちだけ……」

僕らの疑問に対して動じるでもなく、シャルムさんは平然とした態度で返す。

「私は別に君たちを優遇しているわけではない。単に、正当な評価としてこれだけの報酬額をつけ
たんだ」

「正当な……評価？」

その答えにますます首が傾く。

クロリアの言ったパーティーを参考にすると、普通なら僕たちの報酬は一万以下……だいたい
八千ゴルドくらいのはずだ。それが倍近くまで膨れ上がるとは、いつたいどんな評価を受けたんだ
ろう？

「昨日、君たちからウイザートレン特の魔石を受け取ったとき、私は違和感を覚えて報酬を保留に
した」

「は、はい」

「そしてその後調べてみたところ、私の見立て通り、あの魔石は普通のものとは違う代物だったの
だ。いや、魔石というよりは、その宿主……ウイザートレン特の方がな」

「……？」

僕は変な魔石が少し交ざっていたのかと考えていたけど、まさか魔石ではなくその宿主が、シャ
ルムさんの違和感の原因だったとは。

では、僕たちが倒したウイザートレン特は何が違ったのだろう？

いまだに疑問が晴れずにいる僕とクロリアに、シャルムさんは逆に質問を投げかけてきた。

「昨日、奴らと戦っているときに、何か気付かなかつたか？」

「えつ……？　えつと……」

「たとえば、少しだけ強く感じたとか……」

「あっ！」

彼女の言うとおり、昨日は敵が少しだけ強く感じた。

初心者用モンスターと呼ばれている割には厄介で、意外と手こずつてしまつたのだ。

僕はそのときのことを思い返しながら語る。

「確かにそんな感じはしました。情報ではレベル10のはずなのに、体感としてはもうちょっと上の
の……レベル13、4くらいだと」

「ああ。まさに敵が強くなつていたんだよ。通常ならビギナーズライン（レベル10）で止まつて

いるはずのウイザートレントが、その境界線を越えてレベルが上昇していた。原因は不明だが、このような事態は今回が初めてではなく、最近は度々発生している。そのせいで魔石の換金レートや討伐報酬の変動が激しくてな……。だから昨日、報酬を保留させてもらつたのだよ。こうした事態を受けて、現在ギルドは大忙おおいそがしだ。今日は特にね」

シャルムさんはギルド内を見渡しながら言う。

昨日もなんだか混雑していたし、今日も朝から騒がしいのはそれが原因だつたのか。この辺りで討伐依頼を完了した人たちの報酬に変動があるせいで、現在ギルドの受付はごたごたしているというわけだ。

そういうえば最近、この近辺のみならず、野生モンスター全体に異変が起きているという噂が立つている。

昨日のウイザートレントの件もそれに該当するなら、噂は本当だつたのかな？ でもいつたい、なんでそんな事態に？

無意識のうちに深い思案にふけつていると、不意にとんとんと背中をつつかれた。

振り向くと、クロリアが「受け取らないんですか？」と、目の前の報酬を指差して聞いてくる。僕はすっかり忘れていたそれに手を伸ばし、シャルムさんに会釈えしゃくして受け取つた。受付カウンターの奥に目を向けると、酒場よりも一層慌ただしくギルドの職員さんたちが走り回つていて、見るからに忙しそうだつた。

シャルムさんも同様に、僕の視線を追つてちらりと振り返ると、肩をすくめて言う。

「とまあ、色々と大変な事態になつてゐる。対応が安定するまで、最低でもあと一週間はこれが続くだろう。……そこで、君たちにお願いがあるんだが」

『……？』

突然改まつた様子でそう言われて、僕とクロリアはきょとんと首を傾げる。

「いや、お願ひと言うと私的な頼みのようになるか。そうではなくて、君たちにギルドから直々に依頼があるんだよ」

「ギ、ギルドからの依頼、ですか？」

「ああ」

シャルムさんはしつかり頷きながら、カウンターの裏から革袋を取り出した。

報酬用として用意されたものよりも、大きくて頑丈じょうぶそうな袋だ。

カウンターの上に置かれたそれは、ごとごと、じゅらじゅら、という乾いた音を立てる。「ここらで取れた魔石を、ある場所に持つて行つてもらいたい」

赤髪のクールな受付さんは、少し真剣さを増して言う。

「魔石……ですか？」

「ああ」

僕は、卓上の袋とシャルムさんを交互に見て眉を寄せる。

彼女は袋の口を緩めて、中を見させてくれた。

袋にはざつと大小様々な魔石が三十個以上詰まつていて、種類も豊富なようだ。

見覚えのあるものもいくつもあるので、この辺りで取れる魔石が集まつてているのだろう。

これをどこかに運ぶ、つてことでいいんだよね？

ギルドから直々に指名してくれるのは嬉しいけど、新人冒険者の僕たちに指名依頼が来るなんて、

どういうことだろう？

それに、なぜ魔石を運ぶ必要があるのか？

二つ返事で了承したい気持ちを抑えつつ、遠回しに理由を探つてみた。

「荷運びの依頼なら、専門の人に頼んだ方が……」

たとえば、僕とライムがこの街に来るときにお世話になつた魔車ましゃとか。

その方が断然速いし、たぶん報酬金も安く済む。

冒険者に払う依頼料は専門の人に頼むよりも高くつく場合が多いから。

そんな僕の心中を察して……いや、元々そういう反応を予想していたのか、シャルムさんは明らかに用意していた回答を口にした。

「魔石は高価な換金アイテムもある。悪人に喰いつけられて運び屋を狙われでもしたら、魔石が奴らの酒代と化してしまう。それに、中には荷物を掠め取るあくどい運び屋もいる。こういう内々の依頼は、ギルドで顔を合わわせている冒険者が一番いいのだよ」

妙に早口で言われてしまつた。

しかしそれならば……と、僕は率直に思つたことを口にする。

「なら、僕たちよりも強い冒険者に頼むべきじや……」

「依頼を受けるのが嫌なのか？」

「そ、そういうわけではなくて……ただ、不思議だつたので」

焦あせつて手をぶんぶんと振る僕を見て、シャルムさんはふつと表情を綻ほばせた。

「いや、すまない。少し意地悪だつたな。新人冒険者の君たちが、突然指名を受けて依頼されたなら混乱するのも無理はない」

「い、いえ……」

「今回君たちがこの依頼を選ばれたのは、別に成績がいいからとか実力があるからというわけではないよ。この件が私に回ってきたから、独断で君たちを選んだのだ。そう気を張る必要はない」

……独断？ それはつまり、シャルムさんがこの依頼を僕たちに任せたいと思つてくれたということなのかな。

「魔石を運んでもらう先は、ある街にいる魔石鑑定士の所だ。名前はペルシャ・アイボリー。このあたりでは唯一の魔石鑑定士で、魔石鑑定の依頼はほとんど彼女のところに送られている。そこで、グロッソの街周辺で取れたこの魔石たちを鑑定してきてもらいたい。頼めるかな？」

まるで子供にお使いを頼むかのような調子で依頼されてしまつた。

依然として、シャルムさんが僕たちを選んだわけは分からぬけど、依頼の内容は理解した。

魔石鑑定士とは、従魔の力を使って魔石を鑑定し、その効果や価値、どんなモンスターが宿していたのかなどを詳しく調べてくれる人だ。

従魔の力と同様、魔石は僕らの生活に必要不可欠な存在だから、このような魔石鑑定を専門にする人が少しずつ増えてきているという。

世の中にはモンスターそのものを鑑定するスキルもあるみたいだが、だいたいの野生モンスターのレベルは、魔石鑑定によつて割り出されている。ウイザートレントも同様だ。

今回の『野生モンスターのレベル変動事件』の調査に魔石鑑定士の力が必要なのは、僕でも分かる。

シャルムさんは真剣さを増した表情で続けた。

「野生モンスターのレベルが変動してしまったせいで、色々な混乱が生じている。そこで、魔石鑑定士のペルシャ氏に魔石を精密鑑定していただき、グロッソ周辺のモンスターの正確なレベル、スキル、魔石レートを詳しく知るというのが、今回の目的だ」

改めてそう言われて、僕は冷や汗を流す。

思つた以上に大事になつてゐるようだ。

この依頼も、シャルムさんが言うような気軽なものだとは思えない。

「うーん……」

眉間にしわを寄せて唸つてしまつた僕を見て、シャルムさんは一瞬だけきよとんとする。

「まだ頼まれた理由に納得できない様子だね」

「は、はい。どうして僕たちなんだろうつて……」

シャルムさんは額に手を当ててふむと頷く。そして、なぜか髪色と同じ赤に頬を染めて、今まで

見たことのない妖艶な笑みを浮かべて言つた。

「私が君のことを、深い意味で信頼しているからだ」

「えつ……」

……えつ……えつ……ええええ!?

という絶叫は、一瞬で元に戻つたシャルムさんの真顔に遮られてしまった。

「ま、冗談は置いておくとして……他にも頼める冒險者はいないものだが、生憎その者たちはこの街の周辺で強くなつたモンスターたちを討伐するので忙しくてな、手の空いていそうな君たちに頼んだのだよ」

ふつと悪戯な微笑を浮かべてそう言われてしまった。

僕は呆けたように口を開けて、数秒固まる。

なるほど。結局、この魔石運びの依頼は、手の空いている冒險者なら誰でもよかつたということがだ。

シャルムさんにこの一件が回されたのなら、いつも彼女に受付をしてもらつてゐる僕たちにこの

話が来たことも自然な流れかもしない。

大人の女性にからかわれた僕は、小さくため息を吐きながらうなだれる。その様子を後ろで見ていたクロリアが、僕の顔を覗き込んで声を掛けた。

「……ルウ君？」

「…………ううん。なんでもない」

僕はすぐさま立ち直り、一つ咳払いを挿んで言う。

「ま、まあ、そういうことでしたら、受けないわけにはいかないですけど……」

「……まだ何か不満が？」

「い、いえ、不満というか、不安というか……」

シャルムさんの言うように、腕の立つ冒險者はここら辺で強くなつたモンスターを狩らなければならぬ。ならば僕たちが適任というのは分かるけど、なかなか踏ん切りがつかない。

「ああ、ちなみに、魔石鑑定士とたんじがいる街は……ティマーズストリートだ」

それを聞いた途端、僕の唸り声がピタリと止まる。

シャルムさん、僕、クロリアの間にわずかな静寂けいじやくが訪れた。

僕は口を閉ざし、石のように固まつた。

それを不思議に思ったのか、女性二人が怪訝けげんそうに僕の顔を覗き込もうとする。しかしそれより

も早く、僕は大声で叫さけんだ。

「テ、テ、テ、ティマーズストリートですか!?」

「あ、ああ……」

僕の叫びにシャルムさんは若干引き、後ろのクロリアは驚いて小さく後退あとずさつた。

先ほどまでの葛藤かつとうをすっかり忘れて、僕は捲し立てる。

「う、受けます！ 受けさせてください！ 魔石運びの依頼！」

「えつ……あ、ああ。よろしく頼む」

僕の態度が突然変わったことに、シャルムさんは目を丸くする。

「あの、ルウ君。ティマーズストリートになんの用があるんですか？」

クロリアが遠慮がちに僕に聞いてきた。

驚く僕とは正反対に、彼女はどこか冷めた表情をしている。

「えつ!? いや、なんの用つて、そりや……！」

僕は彼女に、ティマーズストリートに行きたがつている理由を熱弁した。

ティマーズストリート。

世界最大の都市とまで言われている、一流ティマーたちが集うティマーのための街。

ティマーのための商店街、ティマーのための学校、ティマーのための闘技場などが集まり、年中お祭り騒ぎの都市だ。

冒險者ギルドの本部も設置されているので、冒險者が集う街と言い換えることもできる。

そして僕が愛読している冒險譚でも中心になつていていた街で、英雄たちの逸話も数多く語られている。

だからこそ、僕は人生で一度はその街に行つてみたいと思っていた。自分の相棒を連れて、その街をティマーとして歩いてみたいた。

そんな思いを長々と語つていると……

「そ、そうですか……」

クロリアに苦笑いされてしまった。

見ると、彼女の腕の中にいるミュウはすぴーすぴーと寝息を立てはじめ、対して僕の頭上にいるライムは目を輝かせて話に耳を傾けていた。

男の子と女の子では感じ方が違うのだろうか。

そんな僕たちのことを静かに見守っていたシャルムさんが、咳払いで僕らの注意を引いた。

「ごほん……では、行つてくれるのだな？」

「えつ……は、はい。構いませんけど」

パーテイメンバーの了承も得た。

これで念願のティマーズストリートに行ける。

興奮を隠しきれずにソワソワしていると、シャルムさんがカウンターの上の袋を差し出してきた。「で、これが運んでほしい魔石だ。大きな魔石も入っているから、結構重いぞ。鑑定結果はこのギルドで私に直接報告してくれ。依頼の報酬は、魔石の返還を確認したら渡そうと思う。それでいいかな？」

「はい！」

僕は大きく返事をして、多種の魔石が入った袋を受け取る。

正直、結構重たい。でもティマーズストリートに行けるなら、どうってことはない。

僕は肩に掛けたカバンに袋をしまうと、すかさずクロリアの手を取つた。

「えつ？　ちょ、ルウ君……」

戸惑うクロリアをよそに、僕は元気よくシャルムさんに言う。

「それでは、行つてきます！」

「ああ、頼んだぞ」

彼女のその声に背中を押されて、僕はクロリアの手を引いてギルドを飛び出した。

わわつ、と驚いた声を上げる少女とともに、目的地に向かつて走り出す。

早く行きたくて仕方がない。

グロツソの街の東にある、ティマーズストリートへ！

こうして僕たちは、野生モンスターのレベル変動事件の対処のため、ティマーズストリートを目

指すことになった。

2

広くて見晴らしのいい草原を、一本の街道が貫いている。

まるでフリーハンドで描かれた線のように所々で蛇行しながら、地平線の先に消えていく。その道の上で僕たちは、進路の先に立ちふさがる野生モンスターと対峙していた。

前衛にライム、中衛に僕、後衛にクロリアとミュウという布陣で、敵を睨みつける。

「ライム、【限界突破】！」

「キュルキユル！」

僕の声に反応して、ライムは水色の体を真っ赤に染める。

そして前方の敵に向かつて駆け出した。

「ブルル！」

素早い動きが特徴の小さな猪は、スマールボア。この辺りではよく出没するモンスターで、人を見かけると潰れた鼻を突き出して突進してくる。

その例に漏れず、眼前の小猪は、短い足を動かして疾走してきた。

ライムとスマールボアが急接近する。見たところ、速さはライムが勝る。

瞬間、後方から少女の声が響いた。

「ミュウ、ライムちゃんに【プレイブハート】です！」

「ミュミュウ！」

次いで可愛らしいモンスターの鳴き声が聞こえると、ライムの体が薄赤い光に包まれた。

「キュル！」

その現象に後押しされるように、ライムは俊敏なステップで小猪の突進を躊躇す。

そしてがら空きになつた奴の脇腹に、すかさず真っ赤な体で激突した。

「キュルル！」

「ブルッ！」

ドスッと鈍い音とともに、スマールボアの小さな体は吹き飛んで、草むらを何度もバウンドした後、鮮やかな光の粒となつて消えた。

【限界突破】と【プレイブハート】の合わせ技による、超威力の体当たり。

最近また強くなつたライムだけど、さらにそこにスキルの威力と支援魔法が重なつては、スマーボアもひとたまりもなかつたらしい。

スマーボアの消滅を見届けた僕は、赤いライムを数回撫で、後ろのパーティーメンバーと手を打ち合わせる。

立ち読みサンプル
はここまで

「お疲れ」

「はい、お疲れ様です」

彼女の声に相槌を打つよう、胸に抱えられたミュウも鳴き声を上げた。

グロッソの街を出発してから二日。

途中にあつた小さな村で休憩を挟みつつ、僕たちは目的地であるティマーズストリートを目指して歩いていた。

空は快晴。時折吹き抜けるそよ風は気持ちよく、見晴らしのいい草原の景色は僕たちの目を飽きさせない。

しかし、かれこれ二時間も歩き続けている。

背中のカバンに詰めた魔石は重いし、モンスターもたくさん襲い掛かって来るので、正直しない思いをしていた。

でもまあ、一つ前の村で聞いた話だと、次の村からティマーズストリート行きの魔車が出ているそうなので、それまでの辛抱だ。

心中で自分を奮い立たせながら、僕はスマールボアが落とした魔石を拾い上げる。

普段なら、魔石は討伐依頼の証明としてギルドに差し出してしまったが、今回の目的はティマーズ

ストリートに行くこと。

道中で手に入つた魔石は僕たちの自由にしていい。

